

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心 理 学 ）	氏名	難 波 修 史
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
情動体験を伴う表情刺激の作成と情動伝染モデルの妥当性の検討			
論文審査担当者			
主 査	教授	宮 谷 真 人	
審査委員	教授	中 條 和 光	
審査委員	教授	森 永 康 子	
審査委員	准教授	中 尾 敬	
〔論文審査の要旨〕			
<p>他者が楽しそうに笑っている顔を見ることで、自分も思わず笑顔になって楽しくなってくる。このように、情動の体験により生じた他者の表情を観察することで、その他者と同じ情動の体験が観察者自身にも自動的に生起する現象のことを情動伝染という。本研究はこの情動伝染の生起プロセスを説明する情動伝染モデルの妥当性を検討したものである。情動伝染モデルでは、表情観察による表情模倣の生起、及びその表情模倣に伴う情動の生起、というプロセスが想定されている。</p> <p>論文は4章で構成される。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」において著者は、先行研究において情動伝染モデルを支持する証拠が得られていない原因として、情動体験に伴って生起した表情（体験表情）ではなく、教示に沿って意図的に作成された表情（意図表情）が観察対象として用いられてきたことをあげている。情動伝染モデルでは観察対象である表情に情動体験が伴っていることが前提とされていることから、そのモデルの検討にはその前提を満たす体験表情を刺激として用いる必要があるとしている。さらに著者は、これまで体験表情とされてきた刺激には2つの問題、すなわち①社会的要因による表情の意図的な操作の可能性、および②表情の動きについての情報の軽視、があることを指摘し、これらの問題を克服した体験表情を作成した上で、情動伝染モデルを検討する必要があることを述べている。これらの問題を踏まえ、本研究の目的が、①体験表情の形態的な特徴を明らかにし、情動伝染の研究において使用可能な表情刺激を作成すること、および②情動伝染モデルの妥当性の検討を行うこと、であることが示されている。</p> <p>第2章「体験表情刺激の作成」では、体験表情の形態的な特徴を明らかにし、体験表情の刺激を作成するために実施した3つの実験が報告されている。実験1では、情動喚起映像の視聴といった手法によって生起した情動体験と、その際に表出された表情の各要素との関連を検討している。体験表情に関する先行研究の問題としてあげられていた、社会的要因による意図的な操作の可能性を排除するため、実験中は実験者が部屋から退出し、また表情の撮影について事前に参加者に伝えずに、実験後に撮影していた事実を伝えてデータの使用許可を得る、という手続きを採用している。その結果、驚き、嫌悪、幸福、悲し</p>			

みといったそれぞれの情動体験と関連する表情要素を明らかにしている。

実験 2 では、体験表情と意図表情とを表情の各要素の表出頻度および表出順序について比較することで、体験表情の特徴を検討している。意図表情は、カメラの前で「幸福」の表情を作成してくださいといった教示を行う感情教示法を用いて撮影している。実験の結果、嫌悪、悲しみの表情要素の表出頻度について、体験表情と意図表情との違いが明らかとなった。また、驚きと幸福では表情要素の表出順序について、体験表情と意図表情の間に違いが認められている。

実験 3 は、実験 2 で明らかとなった形態的特徴を有する体験表情が、観察者からみても情動体験を反映した表情と判断されることを確認することを目的としている。実験の結果、体験表情が観察者からみても情動体験を反映した表情と判断されることが示されている。

第 3 章「体験表情を用いた情動伝染モデルの検討 (実験 4)」では、第 2 章の実験を通して作成された表情刺激を用いて、情動伝染モデルの妥当性を検討している。実験の結果、意図表情を観察した場合は異なり、驚きと幸福の体験表情を観察することで、観察者に刺激と同様の表情が生起し、その表情反応が情動体験と相関していることが示されている。その上で、この結果は情動伝染モデルを支持するものであることが述べられている。

第 4 章「総合考察」では本研究の成果として、①体験表情の特徴を明らかにし、情動伝染の研究で使用可能な表情刺激を作成したこと、および②驚きと幸福という二つの情動においては、体験表情を用いることで情動伝染モデルを支持する知見が得られたことがあげられている。その上で、残されている今後の研究課題として、驚き、嫌悪、幸福、悲しみの 4 種類以外の情動についても検討する必要があること、嫌悪および悲しみといったネガティブ情動に関して情動伝染モデルが支持されなかった理由について検討する必要があることなどがあげられている。

本論文は、次の 3 点において高く評価できる。

- (1) 厳密に統制された実験と測定を行うことで、社会的要因による表情の意図的な操作の影響を排除した体験表情刺激の作成を行っている。本研究は、これまで使用されてきた意図表情とは異なる特徴を有する体験表情を、今後の研究で利用することを可能にしており、表情研究の発展に寄与するものと言える。
- (2) 従来の表情研究では、表情の表出順序といった動的側面については注目されていなかった。本研究では動的側面について解析することの重要性が示されており、今後の表情研究においても利用可能な表情解析手法の拡張を行っている。
- (3) 先行研究において情動伝染モデルを支持する結果が得られていなかった理由について、論理的に仮説を導き出し、その仮説の検討に必要な刺激の作成から取り組むことで、情動伝染モデルを支持する証拠を示している。情動伝染モデルは複数の社会的認知のモデルで前提とされており、その前提の妥当性を実証できたことの学術的意義は大きい。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 30 年 7 月 30 日